みやもとだより

第5号　平成26年　9月発行

季節のおまつり

佐原の大祭

よく「小京都」とか「小江戸」といわれるが、小京都は京都のような雰囲気のある町、また小江戸は江戸のように栄えた町といった意味で、佐原は関東では川越、栃木と共に小江戸と呼ばれ、古い商家や蔵が多く残っている。江戸時代には利根川水運の中継地として大変栄えた町である。

「お江戸見たけりゃ佐原へござれ、佐原本町江戸優り」とも唄われた。町の中心を流れる掘割の小野川沿いには商家が軒を並べているが、その一つには江戸時代の商人で、また測量家として日本史上初の正確な国土地図を作った伊能忠敬の旧家もあり、現在は記念館になっている。

水路を利用して江戸との交易が頻繁であった佐原では、祭礼も江戸の影響を受け、享保年間には山車と囃子を主体とした祭が始まった。特に「佐原囃子」は日本三大囃子の一つと言われ、そのメロディーは情緒的である。

江戸型の山車が江戸城門を潜るため三層構造であったのに対し、佐原は総欅造り二層構造で見事な彫刻が施されている。山車上部には歴史上の人物の大人形が聳え立ち、下段には佐原囃子の下座連が鈴なりに腰掛けて笛や鉦太鼓、小鼓などを大勢で囃す。山車の曳手は辻々で立ち止まり手古舞の流れをくむ手踊りが舞われ、山車が佐原囃子に乗って小野川べりを行く様は長閑である。他方山車を時計回りに回転させる「のの字廻し」や「小判廻し」などの「曲曳き」もあり観るものを飽きさせない。

佐原の大祭は、八坂神社祇園祭（夏祭り）が七月に本宿地区で行われ、諏訪神社の秋祭りは十月の第二金、土、日曜に新宿地区で行われる。

（写真・文　宮本卯之助）

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

太鼓むかしばなし

太鼓判

「品質を保証する」という意味の慣用句「太鼓判を押す」。その由来は、太鼓胴に焼印を押す作業にあると考えられています。丸みを帯びた胴に、平らな判を押すことも熟練の技だったのでしょう。一般的には、小判型の丸の中に二文字で屋号などが入ります。私共でも大正頃までは「太鼓屋の卯之助」から「太卯」（写真右：「卯」は旧字）と押しておりましたが、現在は社名プレート（写真左）を取り付け、当時の想いを受け継いでおります。

浅草徒然につき

白鷺の舞

浅草の年中行事には浅草寺舞が三つあり、「金龍の舞」、「福聚の舞」と「白鷺の舞」があります。白鷺の舞は東京百年祭を記念して昭和四十三年（一九六八年）に創始奉納されました。京都八坂神社の祇園祭の「鷺舞（さぎまい）」を参考にして『浅草寺縁起』の遷座式に登場する「白鷺の舞」を再興したもので、白鷺に扮した踊り子八名はじめ演者、楽人など平安時代を彷彿させる雅な舞いです。毎年四月の第二日曜、五月の三社祭と十一月三日に行なわれます。

昭和六十一年（一九八六年）、東京パリ友好使節の一環として、浅草神社の本社神輿一之宮がパリ市庁舎前他を渡御し、同時に白鷺の舞も奉演されました。パリっ子は初めて見る豪華な神輿や美しく優雅な白鷺の舞に驚きと感銘を受けました。当社より二名の職人と私がこの使節団に参加しお手伝いさせていただいたことは、私共の良き思い出です。

（写真・文　宮本卯之助）

※浅草寺ホームページ一部参照

古典芸能へのとびら

櫓太鼓

そのむかし、歌舞伎の劇場出入口には櫓が設けられ、興行のお知らせや客寄せのために太鼓が打ち鳴らされました。江戸時代初期の絵師・岩佐又兵衛の「洛中洛外図屏風」には、長胴太鼓が置かれた櫓の上で、太鼓を打つために控えている人たちが描かれています。しかし、江戸時代後期の浮世絵には櫓太鼓が見られないことから、いつの頃からか衰退していったと考えられるのです。江戸幕府公認の証とされた櫓は、劇場にとっては大変重要な存在でした。

昨年開場した歌舞伎座では、柿葺落興行の一年間は櫓が上がっておりましたが、例年ですと間もなく十一月の顔見世興行の際に櫓が組まれます。

九月中頃、東京は祭礼のピークを迎えます。繁華街から住宅街まで、普段は見えない「ご近所さん」が東京中に現れます。宮本でも方々のご挨拶廻りに忙しくも幸せな週末、私も各地に伺いました。人々の繋がりが希薄になったと言われる昨今ですが、中には年を追うごとに盛んになる祭礼もあります。そうしたお祭りに共通しているのは、神社、氏子を含めた地域の繋がりが強い事です。お話を聞いてみると、お祭に参加していない氏子さんを廻り、反発や困難を乗り越え、祭の形を時代に合わせるなど、皆さん実に地道な努力の積み重ねをされている。便利全盛の時代だからこそ、面倒を買う事で地域の絆が強くなるという事でしょうか。そんなお祭が一つでも多くなるように、私達も精一杯のお手伝いをと感慨深い週末でした。

宮本卯之助商店
代表取締役社長
宮本芳彦

発行
株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一―〇〇三五
東京都台東区西浅草 二―一一―一
電話 〇三―三八四四―二二四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp